

志賀直哉『灰色の月』のポリテイクス

加藤 三重子

はじめに

志賀直哉の短篇小説「灰色の月」は、日本の敗戦後間もなく『世界』創刊号（一九四六年一月号）に発表された。この雑誌の発売は一九四五年十二月二〇日、「灰色の月」の執筆は同年一月である。「灰色の月」は、「シンガポール陥落」（『文芸』一九四二・三）以後、戦時中に作品らしい作品を発表していない志賀の、戦後第一作目の小説に当たる。

『世界』の創刊号から第一五〇号（一九五八年六月号）まで編集長をつとめた吉野源三郎は、後に、創刊時を振り返って、「志賀さんの『灰色の月』が、多くの人に非常に強い感銘を与えた。空襲でうちひしがれた東京の廃墟を背景に浮浪

児を描いた小品であつたけれど、凜とした作品で、戦火も焼きつくせなかつた珠玉の存在を、私たちにはつきりと知らせてくれたのである」という。⁽¹⁾ また、宇野浩二は、「灰色の月」を、「大抵の人が見すゝすやうなことを、例の簡潔な書き方で、殆んど終戦直後の世相の一端が生き生きとまざまざと現れてゐる」として、「遠く電車の頭灯が見え、暫くすると不意に近づいて来た。」などといふ書き方は文字どほり無類である」と高く評価している。⁽²⁾

主に文章の技巧を褒め称えるこうした述懐がある一方で、同時代評に小田切秀雄や太宰治らによる、「灰色の月」の「私」について倫理的な批判があつたことは周知の通りである。小田切は、「灰色の月」について、「作者がおしまひのところどうにもならぬといふところで安易に引返してしま

ふ、あれでは仕方がない」、「どうにもならぬといふことにこたはつたり苦しんだりしてゐる様子はない。絶望なぞといふはげしい言葉はそこへは決して持ち出せない。あつさりといふ返してしまつてゐることで作品が浅く出来上つてゐる」と裁断した。³ もっとも、『近代文学』派に属する小田切が、戦後の状況認識の異なる志賀の作品に対して、批判を展開するのは当然のことであるとも言える。⁴

『灰色の月』はあの通りの経験をした。(略) この短篇を『世界』の創刊号に出した時、批評で、私がこの子供の爲めに何もしなかつた事を非難した人が何人かあつたが、私はその非難をした人達に同じ事を経験させて見たいと思つた。作品の批評ではそんな事をいふが、実際に其場合、その人達はどういふ事をするだらう。私は何事もしてやれないと感じて、しなかつたのだが、私を非難した人達は出来ても恐らく何もしない人達だらうと思つた。

(「続々創作余談」⁵)

右は、志賀自らの「灰色の月」に対するコメントである。これが、小田切らの同時代評と相俟つて、その後の研究動向

は「灰色の月」における「私」が「少年工」に対して何が出来たか／出来なかつたかを主な論点にするように導かれてきたように思われる。たとえば、「灰色の月」を肯定的に分析した伊沢元美は「文学には解決があるべきだとするのは行き過ぎではなからうか」、「文学は問題のある現実を提示するもので、これが解決は文学以外の分野において行わるべき」であるとして、へ出来なかつたことを弁護している。⁶ 重友毅は「それらの人間(「私」が少年工の爲めに何もしなかつたことを非難した人達Ⅱ引用者注)は、あの状況下で少年工に、たとえ一飯でも恵むことが出来ると思つていたのであるうか。それは忽ち彼自身の一家にその跳ね反りをよぶことになる」という。⁷ この点に関して、より詳しく論じているものに高口智史の論考がある。高口は、「少年工」が「(家)を喪失しているということ」に着目し、それが「配給制度から排除されるということの意味する」と指摘している。したがつて、「(家)を失つた少年工を救うためには」「少年工の生活全てを抱え込む以外に術はない」と述べて、誰もが「少年工」に対して何もへ出来ない状況であつたと論じた。⁸

「灰色の月」に関するこれらの評では、(敗戦国民)として語られるような集団的価値を前提にしていることが理解さ

れよう。このことは、「私」も「少年工」も他の乗客も、あるいは「読者」までもが、あるパラダイムを共有していることになる。言い換えれば、「敗戦国民」として議論されうる特定の集団のあるべき「正しさ」が無前提に希求されているという点において、個々の論評の前提や姿勢は共通しているのである。こうした議論では、「正しい日本人／正しくない日本人」というパラダイムを前景化することによって、作品中の「私」の行為の発動原因が後景に押しやられている。

本論文では、「灰色の月」の掲載雑誌『世界』と戦時下に執筆された「シンガポール陥落」も視野に入れ、今一度、語られる「私」の行為と心情を分析し、「灰色の月」の戦略と政治性を検討することを目的とする。このことは、一九四五年八月一日に戦前・戦後の断絶があると捉えるのではなく、その後も「戦争」が日常化していた時期の言説が如何ように交錯したのかを分析する作業でもある。

Ⅰ 〈私〉と〈少年工〉

「灰色の月」は、冒頭に「八時半頃」とあり、最終部近く「夜九時」とあるように、山手線の東京駅から渋谷駅で降

りるまでの約三〇分間の車内の出来事を中心に、語り手の「私」がある体験と心情を語ってゆく小説である。「私」は電車に乗り込んだときの車内の人物の様子を次のように語る。

私は反対側の入口近くに腰かける事が出来た。右には五十近いもんぺ姿の女がゐた。左には少年工と思はれる十七八歳の子供が私の方を背にし、座席の端の袖板がないので、入口の方へ真横を向いて腰かけてゐた。

遠藤祐は作者の「古い」という観点から「灰色の月」を分析し、作者が車中の人物の年齢に拘っていることを指摘した。⁹⁾しかし、ここで注目すべきは、年齢よりもそれに伴って人物を形容する語句である。「五十近いもんぺ姿の女」「少年工と思はれる十七八の子供」、その他にも「買出しの帰りらしい」「二十五六の血色のいい丸顔の若者」、「リュックサックを背負った四十位の男」が描写されており、後半部には「少年工」が「戦闘帽」を被っていたことが記述されている。年齢とともに「もんぺ」「少年工」「買出しのリュックサック」「戦闘帽」という容易に戦争を連想させるモ

チーフが使用されているのである。「灰色の月」は、「東京駅の屋根のなくなつた歩廊」という出だしから始まり、「灰色の月が日本橋側の焼跡をばんやり」照らしていること、「座席の端の袖板がない」ということを描写し、敗戦直後の日本の様相をありありと描いているのである。逆に、「会社員といふやうな」人物については「四五人の一人」としか描かれず、服装や年齢にまで言及することはない。そうすることによつて、物語は〈敗戦〉を強調し、描かれる人物達、各々に、もたらされた〈敗戦〉による（おそらくは、貧窮した）生活や暮らしを想像させるのである。伊沢元美は「仮構性や物語性のある作を若し手のこんだ作と言うことが許されるならば『灰色の月』は凡そ手のこまない作である」と言つたが、かつて、織田作之助が「作者の体験談が『灰色の月』になるまでには、相当話術的工夫が試みられて、仕上げの努力があつたものと想像される」と評したように、⁽¹⁰⁾『灰色の月』は決して、見たものをへそのまま描写しているわけではないのである。

その子供の顔は入つて来た時、一寸見たが、眼をつぶり、口はだらしなく開けたまま、上体を前後に大きく揺

つてゐた。それは揺つてゐるのではなく、身体が前に倒れる、それを起す、又倒れる、それを繰返してゐるのだつた。居睡にしては連続的なのが不気味に感じられた。私は不自然でない程度に子供との間を空けて腰かけてゐた。

「不自然でない程度に子供との間を空けて腰かけてゐた」とあるように、「私」は、「私の方を背にし」「入口の方へ真横を向いて腰かけてゐた」「少年工」とは、物理的にも、心情的にも未だ関わりを持つていない。しかし、「一寸見た」だけで、「少年工」の様子をこうまで詳しく描写しているところに、この後、「少年工」をめぐつて何かしらの出来事が起こるであろうことを予測させる。

「まあ、なんて面をしてやがんだ」といふ声が出た。それを云つたのは会社員といふやうな四五人の一人だつた。連の皆も一緒に笑ひだした。私からは少年工の顔は見えなかつたが、会社員の云ひかたが可笑しかつたし、少年工の顔も恐らく可笑しかつたのだらう、車内には一寸快活な空氣が出来た。

この場面は、「読者」に何か不協和音にも似た響きを感じさせてはいまいか。「私」は「少年工」の顔を見ていないのである。それは、作中、唯一、「私」が「少年工」に話しかける場面において、さらに、明らかにされている。

「東京駅でゐたから、乗越して来たんだ。——何所から乗つたんだ」私はうしろから訊いて見た。

少年工はむかうを向いたまま、

「渋谷から乗つた」と云つた。

「私」と「少年工」は、ついに顔を見合わせるのではないのである。それは、「少年工」という「敗戦国民」の具体的な存在から、目を背けようとしつつも、それから逃れられずにはいられない作者の心情を物語っている。顔を見ようとしてない「私」から「少年工」に対する働きかけは、一方通行でしかない。吉田正信は「尋ねたことじたい、「私」にとつて『一層気の毒な想ひをした』ことによる償いの意味合いがあると言う。それは首肯されるべき分析であるように思われるのだが、では、なぜ、「私」は、「少年工」の姿に負い目にも似た感情を持つてしまうのであろうか。

少年工は身体を起こし、窓外を見ようとした時、重心を失ひ、いきなり、私に寄りかかつて来た。それは不意だったが、後でどうしてそんな事をしたか、不思議に思ふのだが、其時は殆ど反射的に寄りかかつてきた少年工の身体を肩で突返した。これは私の氣持を全く裏切つた動作で、自分でも驚いたが、その寄りかかれた時の少年工の身体の抵抗が余りに少なかつた事で一層気の毒な想ひをした。私の体重は今、十三貫二百匁に減つてゐるが、少年工のそれはそれよりも遙に軽かつた。

それは、「私」が「少年工」のような、おそらくは「家」までも喪失してしまった「不幸」を背景に負っていないからではなからうか。たしかに、「私」は戦争のもたらした物質的・心理的余裕の欠乏を味わっている。だが、「少年工」の「身体の抵抗が余りに少なかつた事」、自分の体重よりも「遙に軽かつた」こと……。そういう「私」は「少年工」の直面している危機をまなざすことによつて、自らがそのような「不幸」を背負っていないことを思い知らされるのである。それを「少年工」の身体が雄弁に語つていたのだ。その結果、「私」の「見る」という主体的であつた行為が、対象にされ

た「少年工」の身体が自らの身体に触れたとき、あたかも受動的に見られている「少年工」の身体がその苦痛を語りかけてくることを受け止めることに転換する。

高口は、少年を救うためには彼の身許を引き受けるしかないと述べた。作中で「私の体重は今、十三貫三百匁に減つてゐる」とわざわざ断らねばならない状況（つまり「私も食糧不足の影響を受けている状況」にあつては、少年を「家」に引き取ることなど出来はしない。食糧危機に直面しているということにおいて、「近くの乗客達も」「どうする事も出来ないと思ふのだらう」と推し量り、「私もその一人で、どうする事も出来ない気持」になるしかないのである。

II 岩波文化とハビトウスの裏切り

一九四六年一月に岩波書店より創刊された『世界』は、現在も続く月刊雑誌である。『世界』は、講和問題、六〇年安保、ベトナム戦争、沖縄問題等々、常に大文字の「政治」にかかわる問題を追及し、論壇をリードしてきた雑誌であると言えよう。この雑誌の創刊号に、志賀の「灰色の月」は掲載されたのである。『世界』の創刊当初、「同心会」という

会が雑誌に関わったものの、次第に離れて、新しく「生成会」となつて雑誌「心」を発刊した経緯については、既によく知られている。⁽¹³⁾「同心会」には、戦時中に結成された、その母胎とも言える「三年会」という会が存在していた。

一九四四年（昭和一九）の暮れから終戦に至る間、志賀直哉は敗戦後の国内混乱防止の対策を話し合う「三年会」のメンバーに加わる。第一回目の会合は翌四五年一月二二日であつた。この会合は、小磯内閣の外相重光葵の発意によるもので、重光の秘書官加瀬俊一が山本有三に会の発足に関して打診すると、山本は志賀に極秘に相談を持ちかけた。志賀は山本に谷川徹三のところへ行くように勧める。谷川と山本の話し合いの末、メンバーは、名義上、西田幾多郎を名誉会長にして、山本、谷川、加瀬の他に、志賀、安倍能成、武者小路実篤、和辻哲郎、田中耕太郎、富塚清と決まつた。

敗戦必至となつた一九四五年五月、「三年会」は一二日までに一〇回開かれていたが、最初の意気込みとは裏腹に、「加瀬君来ないから新しい話もきけず、いさ、か気の抜けた寄り合ひ」（志賀直哉、六月二七日付武者小路実篤宛書簡）になつていった。政府筋の情報を最も提供していたであろう加瀬は職務に追われて、「三年会」を欠席しがちであつたの

であろう。谷川徹三は「三年会」について、五月頃には「最初山本さんが考えたような具体的対策を立てることが困難とわかり、勢い話し合いの焦点をしばれず、話題も集中より拡散に向かいがち」になってしまったと回想する。⁽¹⁴⁾「三年会」は現実的には何も行動を起こさなかったのである。

「三年会」は敗戦後、新しいメンバーを多数迎え入れ、一九四五年九月に「同心会」と名を変えて発展し、岩波書店から発刊される『世界』を主に言論活動の場とするようになった。志賀直哉の武者小路実篤宛の書簡には、「同心会」について「会はもつと積極的に何かやる事になり」、「今度は小田原評議に終わらず実際に何かやりさうだ」(九月一九日付)という意気込みが窺える。「同心会」のメンバーが中心となつて「生成会」を結成し、一九四八年七月に雑誌『心』を創刊したのである。

伊藤光晴は、「同心会」の人たちはその後「心」によるようになり、『世界』の変質を批判したが、執筆者の変化は戦前のリベラリストと、戦後のリベラリストとの実力の差ゆえであつたといつてよいであろう⁽¹⁵⁾。近年では、加藤典洋が『敗戦後論』(一九九七・八、講談社)の中で、この執筆陣の変化について、「保守派リベラリストから革新派

リベラリストへの重心の移動」が「なぜか忍び足で」行われ、そのため、「ある大切な差異露頭の場面を、水に流してしまつたのではないか」と言う⁽¹⁶⁾。しかし、こうした事実も、長與善郎に言わせると、次のようになる。

「心」は岩波から離れはしたが、同人は別に同店と絶交したわけではなく、前主人茂雄君と旧懇の安倍君のような顧問もあり、旧著の印税を貰つたりしている同人達が「世界」にも自由に寄稿できることは、新方針の同店にとつてもあまりに門戸を狭くして、露骨な一色に塗りつぶすよりも得策であつたであろう。

〔わが心の遍歴〕一九六三・七、筑摩書房⁽¹⁷⁾

実際、長與の言うとおり、「心」の創刊以後も「同心会」のメンバーは『世界』に度々執筆したり、後まで座談会に出席している。志賀は創刊時から続けて『世界』の「創作欄」を担当していた。その一九四六、四七年を見ただけでも、里見淳や武者小路実篤、網野菊などのような志賀と旧知の間柄の作家が圧倒的に多く登場するが、「同心会」のメンバーではない徳永直、中野重治らも執筆しているのである。

「灰色の月」の最後に記された「昭和二十年十月十六日」という日付の前後を概観してみると、一〇月四日にGHQより民主化指令が出され、一〇月五日に東久邇宮内閣が総辞職し、後を継いだ幣原内閣が五大改革を受け入れ、言論の自由は民主化政策の一環であるとしながら、日本の全出版物の事前検閲が始まった。⁽¹⁸⁾『世界』創刊号においても、安部能成の「剛毅と真実と智慧とを」と和辻哲郎の「封建思想と神道の教義」という論文の部分的削除の指令を受け入れている。

〈同心会〉が『世界』にかけた期待は大きかったと思われる。志賀がどのくらい『世界』に期待をし、自らも創作欄担当者として運営に関わっていかうとしていたかは知る由もないが、「怪談」(初出誌不明、執筆は一九四六・一〇・中旬)という小品には、次のような件がある。息子の直吉が志賀の見た夢をもとに短い小説を書いて見せたとき、志賀は言うのである。

「新青年かオール読物だな」かういふと、
「……………」直吉は一すいやかな顔をした。

(「怪談」)

ここからは、「新青年」も『オール読物』も、志賀のよう

に自らを知識人と認識している人物の読む雑誌ではないということが窺える。では、『世界』はどのような性質の雑誌であったのだろうか。

志賀に代表される〈白樺派〉や漱石門下生の多くが大正期教養主義を身につけているとされるが、これらの関係者の本が殆ど岩波書店から出ている。つまり、岩波文化と称されるものとこの教養派は、その基部を同じくしていることになる。吉野源三郎が最初にたてた見通し通り、『世界』に執筆されると予想される学者を考え、岩波書店から出版されるという事情を考慮すると、それにははつきりとした限界がみえていた。また日本における総合雑誌である以上、『世界』の読者の大多数はインテリゲンチアであるに相違なかった⁽¹⁹⁾のである。

既に永嶺重敏の論考で明らかにされているが、大正期には「労働者をはじめとする大衆読者層の登場」が「読書の『階級性』をクローズアップさせたが、他方、既成の読者の側にもおいてもひとつのリアクションを生み出した。『知識人読者』意識の誕生がそれである」。「大衆読者に反措定として成立してきた知識人読者は、その読書内容においても当然のように大衆読者とは異なるものではなくてはならなかつ

た。このような受容に應えるべく登場してきたのが岩波文化に代表される大正期教養主義と、『中央公論』をモデルとする総合雑誌であった⁽²⁰⁾。このことは、敗戦後の出版界にも言えることで、『世界』創刊号の「編輯後記」には、「国民がこの不幸な状態を切抜けて颯爽たる姿を取戻すために必要な精神的苦闘の公けな機関としての総合雑誌、この未曾有の転換期における指導的思潮の主流を指し示すところの——もしくはそれを採り求めるための——權威ある総合雑誌、さういふ雑誌が出て来なければならぬ」という吉野の文章がある。『世界』は、その一方で、創刊号に岩波茂雄の『「世界」の創刊に際して』という文章を載せた。「私は明治維新の真剣味を追想し、御誓文の精神に生きることが、新日本建設の根本原理であると考へられる」とある。前述の「三年会」は、加瀬の「終戦のときに名状しがたい社会的混乱が起る。あるいは左翼革命が起ることもありはしないか。その場合に備えて、いまから知識人に集まってもらって、どうしたらいいかを考えておかねばならない」という呼びかけのもとに結成されたのであった。⁽²¹⁾ その「三年会」の発展した「同心会」と岩波茂雄は同じ志の下『世界』を発刊したと捉えてよいだろう。岩波茂雄と吉野源三郎との戦後社会の認識の差異が、

『世界』において、今日ではオールドリベラリストと呼ばれる執筆者と当時の進歩的評論家の執筆の混在を許したのである。

『世界』は、時事問題を主とした論文が大部分を占め、ごく一部の限られた知識人を「読者」とする想定の下に編集されていたのである。それを示した例が、『世界』第四号に載せられた津田左右吉の「建国の事情と万世一系の思想」をめぐる騒動である。

津田左右吉と言えば、『神代史の研究』など三冊によって、四〇年出版法違反に問われ、執行猶予つきながら禁固三ヶ月の判決を受けた人物である。その津田が『世界』（一九四六・四）で「建国の事情と万世一系の思想」を書いて、吉野源三郎らに困惑をもたらしたのである。

国民みづから国家のすべてを主宰すべき現代に於いては、皇室は国民の皇室であり、天皇は「われらの天皇」であられる。「われらの天皇」はわれらが愛さねばならぬ。国民の皇室は国民がその懷に抱くべきである。(略) 国民は皇室を愛する。愛するところにこそ民主主義の徹底したすがたがある。

〔建国の事情と万世一系の思想〕

吉野はこの論文を掲載するにあたって「建国の事情と万世一系の思想」発表について」という八頁にわたる事情説明を同号に載せた。異例のことである。戦後社会は左傾すると捉えていた吉野は、〈読者〉を進歩的知識人と考えていた。だからこそ、時流に逆らったような津田論文の反響を考え、自ら筆を執らずにはいられなかったのである。『世界』は、一九四六年三月の岩波茂雄の死後、徐々にではあるが、確実に路線を変えていった。後に、安倍能成などは「私も『世界』を支配する思想や感情や感覚には親近を感じないものがある」、「私は『世界』の今日の傾向の悉くには同感し得ない」と言って憚らなかつた。同店の店員で、『世界』の編集に携わった埴作楽は、『世界』の創刊後、間もなくから既に、『世界』の寄稿者が、すべていけない、というのではなく、同心会の主流は排除すべきであるという理由で、ことあるごとに、吉野（源三郎＝引用者注）さんに「進言」しました。編集部の中川規矩丸も同調してくれて、吉野さんも次第に「基本的には賛成する」と言ってくれるようになりました」と、当時を回想する。⁽²³⁾

「灰色の月」に描かれた出来事が起こるまでの社会状況を今一度、振り返ってみよう。四五年一〇月一日、治安維持法が廃止された。その前後の新聞には連日のように食糧不足を伝える報道がされている。⁽²⁴⁾「灰色の月」の出来事が起こったその日、天皇が食糧増産のために新宿御苑を開放したのである。〈三年会〉のメンバーは、遅くとも終戦の一〇ヶ月前までには、日本の敗戦と戦後の食糧危機を予測していた。そして、志賀は、戦後、食糧危機を題材にした「灰色の月」を書いた。吉野と岩波茂雄の戦後状況の認識には、たしかに溝があつたが、オールドリベラリストと言われる人々の執筆がなければ、吉野が目指した「権威ある総合雑誌」であるところの『世界』は誕生しなかつたのではなからうか。『世界』の創刊号に志賀の「灰色の月」を掲載するということ——それは、大家と見なされていた志賀直哉のネームバリューと、「岩波書店」というブランドを一体化させることによって、より強固な言論界の〈権威〉を互いに生み出したと言える。

しばしば指摘されてきたように、「灰色の月」の「私」は〈食糧難〉という点において他の乗客との関係で優位にいろわけではない。⁽²⁵⁾「少年工」の飢餓状態は明日のおのれの姿か

もしれず、この点において「私」も他の乗客も同位にあるのである。

肩で「少年工」を突き返す場面について、遠藤祐は「心情のヴェクトルとは逆向きのこの『動作』は、意識をこえた本能の動き、死に近い存在がみずからに触れようとしたとき、生命本能の身構えであつたと思われる」、「おのれを押し、破滅に導こうとする〈外敵〉への反撥、自己防衛の本能の素早い反応を、認めるべきなのだろう」という見解を示している。⁽²⁶⁾

この評は、作中の「自分でも驚いたが」「殆ど反射的に寄りかかってきた少年工の身体を肩で突返した」ということばを受け入れ、「私」の行為について、心情を裏切った反射的動作、本能的動作と見なしていることになる。

ここで、ピエール・ブルデューの「ハビトゥス」の概念を思い起こしてみよう。ブルデューは、「起源としての分類形式であるハビトゥスの図式が固有の有効性をもちうるのは、それらが意識や言説の手前で、したがって意志的な検証や統制による把握の外で機能するものだからである」という。「社会的主体が社会界を実践的に知るために活用する認識構造は、身体化された社会構造である」。「身体化された

社会構造」は、「特定の社会的集団の行為者」が「みな一連の基本的な知覚図式を共有し」、それらは「多様な慣習行動の諸領域において人間やものを分類」する。その場合、慣習行動とは、「もつとも無意識な身振り」、「無意味に見える身体技法」であり、こうした「身体および身体にたいする関係の分割形態」が存在する。「当人の社会的アイデンティティ」は、「国家名、宗教名、民族名、職業名、学歴資格」などによって定義される。「種々の階級への客観的分割の産物であり意識と言説の手前で機能する歴史的な知覚・評価図式」は分類する主体が同時に分類される対象でもあるという二重の弁別的機能をもつのである。「そうした対象や慣習行動を通して」「分類図式をそなえた他の主体たちの眼前で、自らを分類するのだ」という。⁽²⁷⁾

「私」が、いくら「少年工」に同情を示していたと言っても、「私」が「少年工」を突き返してしまつたのは、自ら、「少年工」と「私」を「分類」していたからに他ならない。「私」は電車に乗ってすぐに、「少年工」の所作を「不気味」に感じた。これは普通へ文化へと呼ばれるものではなくその基礎を形成する性質のものである。先に、「私」は、「少年工」に寄りかかれることによって、身体化された苦痛を受

け止めることに転換したと述べた。しかしながら、それは、同情しながらも、苦痛を共有するのではなく、突き返すことによって、「私」は、自らに通じる苦痛を専有してしまうのだ。「私」は、そのことに無自覚である。だからこそ、「後でどうしてそんな事をしたか、不思議に思ふ」のである。これを作家論的レベルで言うならば、リベラリストとして自認していた志賀にとつても、思いがけない行為であったはずである。だが、ハビトゥスとは無意識裡に身に付いてしまったものである。「少年工」を肩で突き返したのは、まさに岩波文化人であり、教養派に属していた他ならぬ「私」なのである。これを別の視点から言えば、身体化された岩波文化が「少年工」を拒んだと言えるかもしれない。「灰色の月」における階層の差異を超越した「私」の理念は、生理的レベルでの不快感によって裏切られてしまったことになる。しかも、「私」は車中の乗客の容姿を描写することで、「買い出し」の者でもなく、「会社員」でもない自己を表出しているのである。

「少年工」はどこまで行くのか尋ねられると「上野」と答えた。永野恒雄によれば、ヘパンパン（浮浪者）ヘヤミ市（買い出し）という「敗戦直後の日本を象徴する」三つの現象

が、「もつとも端的にあらわれた場所は、いうまでもなく上野（ノガミ）」であったという。²⁸「灰色の月」において、「少年工」が「物憂さうに答へた」「上野」という地名は、当然、（読者）にも敗戦直後の無宿者や物質的貧窮の象徴として連想されたであろう。「少年工」は、帰る家を失った被災者が多く集まる上野駅に向かっている。「少年工」の「どうでも、かまはねえや」という自暴自棄な虚無的な言葉は終着駅のないう山手線に乗っていることにも投影されている。そして、「少年工」との関わりを避けるしかなかった「私」は、少年の乗った渋谷駅で下車するのである。

III 「灰色の月」の政治性

「灰色の月」の発表から二年後に太宰治は「如是我聞」（新潮）一九四八・三（七）で、「いったいこの作品には、この少年工に対するシンパシーが少しも現われていない」と言²⁹い、その一年後に青山光二は「私（志賀直哉引用者注）」の「少年工」を見る眼は、「戦争などは窓の外を無事通過して行つた、敗戦を体験しなかつた人間の眼である」とした。³⁰しかし、作者の志賀において、「灰色の月」という表題が時

代を象徴し、結末の「暗澹たる気持」に照応していることは言うまでもない。留意すべきは、「灰色の月」が、「少年工」に対する同情や憐れみの心情から執筆されたのではなく、作者本人の「暗澹たる気持」を吐露するために書かれたということである。つまり、「私」（志賀直哉）が車内での出来事を回想するのは、「暗澹たる気持」を引きずったまま、「どうでも、かまはねえや」という「少年工」の独り言が「最後まで私の心に残った」からなのである。

「灰色の月」は、「昭和二十年十月十六日の事である」という一文で締めくくられている。作者は草稿において「十月十六日夜のことであった」としたのを完成稿では「昭和二十年」と付記したのである。高口智史は「最後に年号が記されたことによって、この作品は『私』の個人的な物語に閉ざされていかずに、『私』の体験を未来に告発する構造を持つのである」とした。⁽³⁾ たしかに、元号を付すことによって、現代の「読者」は、敗戦直後の日本の社会の一端を垣間見、そこから、飢餓の問題等を知るのである。だが、この元号にはもう一つ、重要な意味が担わされたものではあるまいか。それは、「灰色の月」の発表直後、一九四六年一月に、戦後の民主化政策の一つとして、G H Q の出した覚書に基づき、公

職追放処分が発令され、国家主義者と見なされた者に、それが適用されたことと関連しているように思われる。

日本軍が、戦時中の一九四二年（昭和一七）一月に、フィリピンのマニラ、二月にマレー半島、シンガポールを占領すると、志賀は、二月一七日のNHKラジオ放送のために「シンガポール陥落」（『文芸』同年三月号に採録）という原稿を書いた。

一億一心は期せずして実現した。今の日本には親英米などいふ思想はあり得ない。吾々は互に謙讓な気持を持ち続け、国内よく和して、光輝ある戦果を少しでも穢すやうな事があつてはならない。天に見はなされた不遜なる米英がよき見せしめである。

若い人々に希望の生れた事も実に喜ばしい。吾々の気持は明るく、非常に落ちついて来た。

謹んで英霊に額づく。

（シンガポール陥落）

「シンガポール陥落」は、戦後、「灰色の月」の批判と並んで、太宰に「阿呆の文章」として罵倒されるのだが、太宰に指摘されるまでもなく、執筆後に、〈三年会〉、〈同心会〉

に属した志賀にとっては消しがたい汚点となっていたであろう。

そこで、岩波文化人であり、教養派である志賀が、敗戦直後に、「灰色の月」を発表したことには、どのような意味が付されるのであろうか。つまり、「灰色の月」の発表によって、志賀自身の問われるべき責任が回避されたと言えるのではないかと考えられるのである。志賀と親交の厚かった武者小路実篤は、公職追放の処分を受けた（五一年に処分解除）。それに対して、志賀は一九四九年四月に武者小路の追放処分に対するGHQに提出する陳情書を書いている。

戦争中に武者小路の書いた物が、追放の理由となつてゐるとの事ですが、それは当時の日本人の気持になつて考へれば科むべきものではないと思ひます。（略）かういふ事はその当時の身になつて考へるべき事で、戦争に負けた今日、如何に戦争が馬鹿氣た事であつたかといふ事を身を以て痛感してゐる此時代の氣持だけで見るのは正しい事ではないと思ひます。つまり、武者小路の全作品を通じてさういふものがあるならば仕方のない事ですが、全作品を見れば、武者小路程人類の平和を説き続けて来

た者は日本でも少ないと思ひます、（略）

「武者小路の人柄と思想」と題されたこの文章（未定稿二二六）は、続けて、前田多門、松村義一、岸田国士のことも言及している。志賀は戦時下の行為の一部分のみを見ての判断ではなく、全作品を通しての思想を見るように訴えているのだ。この武者小路の一件は、戦時中に「シンガポール陥落」を書いた志賀にとって、決して、他人事ではなかったはずである。

志賀が「三年会」のメンバーとして、戦争末期に、敗戦を予測し、「如何に戦争が馬鹿氣た事」であるかを認識していたとするならば、当然、「シンガポール陥落」も、志賀にとって、太宰の批判を待つまでもなく、「馬鹿氣た」文章である。志賀は、「シンガポール陥落」で、「日本軍が精神的に、又技術的に断然勝れてゐる事は、開戦以来、日本人すら驚いてゐるが、日々応接にいとまなき戦果のうちには天祐によるものも数ある事を知ると、吾々は謙讓な氣持にならないではゐられない」と述べた。太宰が敏感に反応したのは、敗戦後の一端を描写した、高口の言う「告発」の構成と「シンガポール陥落」のつながりであろう。志賀は、「灰色の月」

で、食糧危機に代表される切迫した戦後社会を「告発」するために、脆いながらも、「少年工」に同情を示したようにヒューマニズムを描いた。「シンガポール陥落」の時局に傾斜した文章は、志賀の論理、つまり、「全作品を通じて」の思想を見るべきであるという論理によって、武者小路の立場を庇いながら、自己をも弁護しているのである。「シンガポール陥落」の内容は、志賀の論理に沿えば、後年、顧みたとき、志賀の意図に関わらず、同じ作家によって書かれた「灰色の月」のヒューマニズムで相殺されることになるのである。

「灰色の月」は、あるリベラリストにおける車中の人物たちとの階層の差異を超越したヒューマニズムの発見を記した。だが、それは、同時に自らの「ハビトゥス」によって打ち破られていることを見落としてはならない。そして、また、「灰色の月」自体が、ヒューマニズムを前面に押し出すことによって、結果として、志賀をリベラルなヒューマニストとして印象づけた。敗戦後、未だ、戦時色を濃く残していた「昭和二十年十月十六日の事である」と明記することによって、志賀は、過去の文章（「シンガポール陥落」）に対する〈歴史の後知恵〉、あるいは、自己の記した歴史の〈修正〉とも言える行為をおこなったことになるのである。

注

- (1) 吉野源三郎「創刊まで——『世界』編集二十年（二）」（『世界』一九六六・一）
- (2) 「志賀直哉の文章」（『世界』一九五六・三）
- (3) 「新文学創造の主体——新しい段階のために——」（『新日本文学』一九四六・六）
- (4) この点に関しては、高口智史の「『灰色の月』論——志賀直哉と〈戦後〉——」（『近代文学研究』一〇号、一九九三・四）に詳しい。戦後の状況認識の異なる点とは、「戦後をGHQによる『解放』と『支配』という、どちらの視点から捉えるか」ということである。なお、本稿は高口氏の論文に多くの示唆を受けて成立した。
- (5) 「世界」一九五五・六
- (6) 「志賀直哉の短篇小説——『灰色の月』を中心として——」（『島根大論集（人文学科）』一一号、一九六二・三）
- (7) 「文学研究」四五号、一九七七・六（引用は「志賀直哉研究」一九七九・八、笠間書院）
- (8) (4) と同じ
- (9) 「『灰色の月』〈志賀直哉〉」（『国文学 解釈と鑑賞』一九八九・四）
- (10) (6) と同じ
- (11) 「可能性の文学」（『改造』一九四六・一一）
- (12) 「『灰色の月』序説——リアリズムとヒューマニズムをめぐ

つて——」(愛知教育大学大学院 国語研究)四号、一九九六・三)

(13) 「日本の保守主義 『心』グループ」(久野収・鶴見俊輔・

藤田省三『戦後日本の思想』一九九五・九、岩波書店)。谷川徹三『自伝抄』(一九八九・四、中央公論社)九七、一〇二頁等。

(14) 谷川(13) 掲書、九九頁。

(15) 「ふたつの流れ」(『世界』主要論文選、一九九五・一〇、

岩波書店)、一七五頁。

(16) 三四頁。

(17) 三〇一頁。

(18) 高口はまた、「灰色の月」が「飢餓」の問題を中心に据えながら、直接的な表現を回避していると、「灰色の月」と志賀直哉についての新たな見解を提示した。高口は、「なぜ少年工が飢餓状態にあることを語り手は明示しなかったのだらう」という自らの問に対して、「そこには明示することが出来ない状況」すなわち、占領軍の検閲制度(プレス・コード)の存在が作者に重くのしかかっていたという。高口の指摘したとおり、占領下の日本の出版物を研究対象にするならば、検閲制度を無視することは出来ない。志賀は、プレス・コードが発令された一九四五年九月一九日のその日、「言論の自由でこれからは大変よくなる筈だが、アメリカに対する言論は必ずしも自由とは行かぬやうだ」(武者小路実篤宛書簡)とい

う感想を漏らしている。他に、横手一彦も、検閲制度下にあつては「最高司令官批判」、「軍事(極東)裁判批判」、「最高司令官による憲法想起という批判」等々と並んで、「飢餓の誇張表現」が「容赦なく抹消された」ことを明らかにしている(『国語と国文学』二〇〇〇・四)。しかし、一九四六年四月号の『改造』に発表された「国語問題」の冒頭には、「今程厳しい時代を日本は嘗て経験した事がない。(略)一番不安なのは食糧問題である。近頃又、食糧が急に寒々として来た。去年の今頃のやうにそれが心身にこたへて来る事を思ふと、憂鬱になる」とあるので、一概に食糧不足を明示できない状況にあったとは言いい切れない。

(19) (1)と同じ。『文学』(一九四六・一)の「新刊展望」に

は、「戦後はまさに総合雑誌からの感深いものがある」、「雑誌の受け持つ使命は、洵に重大である」、「単行本のあまり多く刊行されない現代にあつては、雑誌に期待するところ実に大なるものがある。雑誌がある意味では今日程その重要性を加へ得たことは、又ないことであらう」とある。

(20) 『雑誌と読者の近代』(一九九七・七、日本エディタースク

ール出版部)、二八―三〇頁。

(21) 加瀬俊一『日本外交の憂鬱』(一九八一・八、山手書房)、二四九頁。

(22) 『世界』と『心』と私』(『世界』一九四九・四)。「心」を『世界』の対立雑誌と捉えるのにはこれまで述べてきたような

理由で無理があるが、『心』の中心人物である武者小路実篤はしばしば『心』の表紙に「文芸思想雑誌」とか「文化雑誌」という頭書を入れ（総合雑誌）との差異化を図っているように思われる。

- (23) 『岩波物語——私の戦後史』（一九九〇・一二、審美社、二七頁）

- (24) 「迫り来る深刻な窮乏」、「過剰人口をどうする……日本の食糧問題は絶望的」（『朝日新聞』一九四五・一〇・一〇）等々。また、終戦の日には「乏しき食糧を覚悟／整然たる供出、忍べ節食」（一九四五・八・一五）、「灰色の月」の載った『世界』創刊号が発売された日には「食糧打開の国民運動」（一九四〇・二〇）という見出しが見られる。

- (25) 前掲論文（4）（7）（13）など

- (26) （9）と同じ

- (27) 『ディスタンクシオンⅡ』（一九九〇・四、藤原書店）三三七～三六五頁。

- (28) 永野恒雄「上野——復興日本の原点」（永野他著『地図の記号論 方法としての地図論の試み』一九九〇・一、批評社、所収）三五～六二頁。因みに、ここでは、「普通ヤミ屋といえは、軍隊の古服に、古靴をはいて、古戦開帽を被った、ひげつ面のおつさんを、標準型に想い出す」という阿部真之助『巷の経済学』（『座談』一九四八・二）が引用されており、本文の「少年工」とほぼ同じ様相を呈していることに気づく。

また、当時の上野の様子は「上野駅に深夜の声／『東京飢う』の予言／浮浪者群の悲劇を診る」（『朝日新聞』一九四五・一〇・五）、「浮浪者の大半は戦災者／上野駅深夜整理報告書」（『朝日新聞』一九五〇・一二・二三）、「多い時は日に六人／恐怖の深夜の宿」（『朝日新聞』一九四五・一一・一八、言うまでもなく「六人」というのは餓死者の数のことである）などという見出しが容易に見つけられる。

- (29) 引用は新潮文庫『もの思う葦』（一九八〇・九）二三四～二五八頁。

- (30) 「敗戦と志賀直哉」（『文学会議』第七集、一九四九・四）（4）と同じ

*本論文における志賀テクストの引用は、『志賀直哉全集』一、一五巻（一九七三・五、一九八四・一一、岩波書店）に拠ったが、旧漢字は新漢字に改め、ルビは一部を除いて省略した。

（かとう・みえこ） 成城大学大学院博士課程後期